



野紺菊ささやく如きオラシヨかな  
堤 保徳  
子ぬ方星見当てい秋濤搔き分くる  
満田光生  
修験のごと礁に佇てる荒鷓かな  
窪田英治  
草の間に木の間に虫の庵かな  
岩上諒磨  
生ることに一途雁割茄子となり  
渡辺真帆  
濃竜胆来世の名前考へる  
宮地良彦  
南蛮や崑崙山に風集め  
金子圭子  
虫の關心は耳の突き当たり  
島田葉月  
鷹渡る給糧艦に製餡所  
宮岡光子  
やすらぎは晩年にあり木守柿  
降籬 康  
名月や十年後には国あるか  
上脇 修  
鯛焼くふつと絆創膏を嗅ぎ  
辰野利彦  
子等へ続く空よ林檎の玉廻す  
宮島英子  
我九十あづきあらひを未だ見ず  
堀尾敏子  
常念岳の機嫌よき日や稲架襖  
田中清子

\*

湯の波は往きて戻りつ年一夜  
増田義幸  
牽牛子の弾け星座を仕立てけり  
安部克詠  
色鳥や人の容の消えて骨  
唐澤南海子  
虫の音と韻き合ひたる磁器の壺  
一志貴美子  
台風過川に鶴が来てアカペラス  
市原啓子  
いくつもの楢円の描かれちちろの夜  
清水睦子  
一切を浄めて白き曼珠沙華  
高松正明  
秋風や頬は涙のすべり台  
神林利一  
玉葱や光源氏の如く泣く  
宮澤羅夢  
気圧されて虫曼陀羅に畏まる  
柴田郁子  
愚痴零した後爽やかに笑うなよ  
柿谷有史  
\*  
いわし雲母に最後の紅をさす  
松原壽美子  
秋の水沈めれば透く吾が身かな  
山崎和之  
箒持てば吾は槃特野分跡  
櫻井喬二  
鶏頭を見つめて開ける作業場  
岩見三七夫

— 同人集・岳集・青雲集から

宮坂静生

巻頭寸言。岳誌にとり、苦悶の一年であった。誌友が気兼ねなく集まることがどれほど素晴らしいことか。コロナ禍以前の着実な毎月が珠玉の日々に感じられる。ようやく、来年の創刊四十五周年に向けて動き出した。そんな中で、毎月月例会の事務一切を担い、本誌の庶務を支えてもらっていた一志貫美子さんの突然の御逝去は痛恨の極みである。働き者でその前日まで仕事をしていたという。なによりも本人にとり充実した生涯であったと推察されることが、いまの私には慰めである。本年度「岳」前山賞を受賞されてよかったです。思う。

なんと古典的でありながら、心惹かれる感性か

草の間に木の間に虫の庵かな 岩上 諒磨

中世の草庵を詠まれたものかと驚き、改めて気がつく、これは虫すだく自然界のこと。アニミズムとでもいいたい世界か。虫が鳴く。虫は一つ一つ庵をもっている。「庵」とはやさしい。広さは一尺(三十センチほど)四方くらいか。人間世界だけにきりきり舞いをしていた私には驚きであった。

修験のごと礫に佇てる荒鶉かな 窪田 英治

東北のきびしい荒磯に佇む鶉を想像する。「修験のごと」

濃竜胆来世の名前考へる 宮地 良彦

「来世の名前」とは戒名ではないであろう。今の世では宮地良彦、さて次の世ではいかなる名がいいか。真から余裕である。「岳集」の〈明日といふ遙かな未来大根煮る〉にも感動した。作者は九十七歳、身体はどこもわるくなく健在。うかがうと週二回一週間分の料理作りにお手伝いに来て貰うかはすべて一人でやる。句会は月二回(昼と夜)。私が見る

今月の秀句

子ぬ方星見当てい秋瀟掻き分くる 満田 光生

私がしばしば引く沖繩民謡「てんさぐぬ花」(鳳仙花)の文句が上の句。「子ぬ方星」とは北極星。秋の夜の荒瀟の航海には北極星を自当てにする意。これだけでは十分には理解できないが、沖繩人の親子が一体となって暮らしてきた艱難の歴史を背景にした民謡を踏まえた句である。作者が自在な作風に沖繩探求を加えたことで、一段と人間洞察にも幅と深みが出てくる予感がある。高校教師を定年で退職し、これからの二年間が俳句の上では人生の勝負処になろう。蕪村の研究者としても独自の著作が待たれる。俳句経験の上では小澤實、宮脇真彦、亡き蜂須賀薫、それに小林貞子を加え十分に研鑽を積んできたはずである。本誌の根幹を担う一人として期待は大きい。錚々たる女性俳人が多い中で、窪田英治を初め、中堅俳人として、有手勉などとともに満田光生の奮起を願う。

と鶉を描きながら、自画像の投影を感じるのは、本人が変わりたい願いを秘めているように読めるからだ。人の良さから俳句組織の役職など引き受けてきた。その上で、何よりも作者独自の個性を究める時期を持たなければならぬ。いよいよその正念場に差し掛かった自覚を促したい。掲句にその兆しが見える。

野紺菊ささやく如きオラシヨかな 堤 保徳

いい句である。先年、作者を交え、長崎から五島列島の福江島に渡った。柏崎など遣唐使が日本を離れる最後の寄港地に立ち、茫洋たる東シナ海を見た。隠れキリシタンの末裔の民宿に泊まり、天主堂ではキリシタンの「オラシヨ」(祈禱)を耳にしたはずである。「ささやく如き」が秀逸。こころに沁みる。長年、作者は厳しい省察に基づき見事な句を詠んでいる。ここ一、二年は殊に独自の句境を開きつつある。佐藤映二のゆたかな句群と匹敵する抜群の力量を発揮し、教えられることが多い。

生きることに一途雁割茄子となり 渡辺 真帆

雁が渡る晩秋に茄子の肌には鱗が入る。「雁割茄子」と長岡辺で称する地貌のことば。地貌季語の類。茄子が「生きることに一途」とは見事。茄子を讃え、人が託されているのが秀逸。

範囲では常に◎。鑑賞は明快。会場へはバス利用か徒歩。生きる最高の手本。どれほどみんなを元気づけておられることか。姿勢はびんと、生き方が清冽この上ない。往年の信州大文学学長。先生は真からのヒューマニストであろう。さて、どんな名がつけられるか。

南蛮や崑崙山に風集め 金子 圭子

「南蛮」は唐辛子か。赤い唐辛子と古代伝説上の崑崙山の取り合わせ。黄河の源であり、仙女西王母がいる仙界。天と地が合わさる処。ごうごうと風を集めているのがいい。努力家の作者。つねに変貌を試みる演劇人の心掛けが生かされている。

虫の關心は耳の突き当たり 島田 葉月

虫の音を聞いた作者により、心の在り処が突きとめられた。耳の奥だという。新発見は本年度一大ニュースになろう。

鷹渡る給糧艦に製館所 宮岡 光子

「給糧艦」は間宮が名高い。海軍の戦艦に食料を補給する艦である。そこに館を作る部門があったという。鷹が渡る時期、戦艦に館を作り届けるとはなんと自在な発想か。

やすらぎは晩年にあり木守柿 降旗 康

長い間、名古屋からこつこつと実に熱心に投句を続けてこられた作者。掲句を見て、感激した。安らかな名句である。

名月や十年後には国あるか 上脇 修

このような句が誌上に登場するとは、日本の存続いかん。従来、考えられなかった国際情勢の不安がひしひしと迫り来る現状への敏感な反応である。頭上をミサイルが飛ぶとは。

鯛焼くふつと絆創膏を嗅ぎ 辰野 利彦

母の指には傷があり、つねに絆創膏の匂いがした。鯛を焼  
きながら痛む。絆創膏が効かないのかしらと嗅いだものか。  
子等へ続く空よ林檎の玉廻す 宮島 英子  
都会暮らしの子等。母はいま林檎に満遍なく日を当てるた  
めに玉廻しのさなか。わかるかしら。ほら。

我九十あづきあらひを未だ見ず 堀尾 敏子

「あづきあらひ」とは昆虫の茶立虫、秋の季語。障子の棧  
などで「チャッチャツ」と音を立てる。その音を茶笥の音と  
も、小豆を洗う音とも聞いたことによる命名。そのうちに見  
られますよ。

常念岳の機嫌よき日や稲架襖 田中 清子

類想はあろうが、堂々たる句。「機嫌よき日」がいい。

今月の秀句

湯の波は往きて戻りつ一年一夜 増田 義幸

年の湯に相応しいゆったりした心地よい句である。作者  
は四十代後半。期待がようやく結実した思いが私にはある。  
よく頑張って、気張らないで素直な句に到達した。少し  
ずつ自ら角をとり、これでいいだろうかと努力してきた。  
少し広い浴槽か、温泉か。湯の波が向こうへ行き戻っ  
てくる。その波を見つめながら、年が終わる思いにふけ  
る。新年を期待。

それはまるやかさ。努力家の作者の到達した境地か。哀悼。

台風過川に鶴が来てアカペラス 市原 啓子

名古屋に市原ありと注目した。自在である。鶴は嬉しいの  
であろう。楽譜なしで思いきり歌う。あつからんと歌う。

いくつもの楕円の描かれちろの夜 清水 睦子

蟋蟀の声の軌跡、拡がりか楕円とは想像が素敵。楽園宮崎。

一切を浄めて白き曼珠沙華 高松 正明

句に迫力がある。名古屋が燃えている。増田義幸ともども  
この作者の精進がうれしい。白曼珠沙華に祈りを感じたもの。  
もう一人、名古屋には池田康樹がいる。

秋風や頬は涙のすべり台 神林 利一

秋風がいい。悲しみの中で、巧いことをいったもんだ。

玉葱や光源氏の如く泣く 宮澤 羅夢

このユーモアのまじめさ加減が秀逸。よよと泣く。俳味横溢。  
気圧されて虫曼陀羅に畏まる 柴田 郁子  
いわき市在住の作者。しげき虫の音でよかった。

愚痴零した後爽やかに笑うなよ 柿谷 有史

視力をご不自由な四十代の青年作者。内心の心理回線が敏  
感で、毎月教えられることが多い。話し手は聞き手を考えてね。

青雲集

いわし雲母に最後の紅をさす 松原壽美子

他に、雪嶺集・前山集から推薦候補作をあげる。

蹴り寄るやうに日暮や茸探 野口美智子  
後ろより日暮来てゐる 虚拔菜 宮坂やよい  
きちこうを漬し原罪始まりぬ 田中 利政  
一湾に一灯新北風くる頃か 池間キヨ子  
かなしければかなしいほどに月は丸 峯 敦子  
こそりこそりと菌のふゆる闇夜かな 市川美八子  
秋雲に乗つてみたくて足鍛へ 太田 継子  
国引の北門の岬の根釣かな 三浦 土火

「牽牛子」とはわかりますかー朝顔の種のこと

牽牛子の弾け星座を仕立てけり 安部 克詠  
牽牛子とは珍しい。朝顔の種が弾けて、秋も更け、天上で  
は星座のオンパレード。お洒落な表現をしている。陶芸に堪  
能な作者らしい構図が見事な作。地上から天上に関心が向く  
秋らしい華やきがある。作者にとり秀作であろう。

色鳥や人の容の消えて骨 唐澤南海子

最愛の夫、徹氏を天上へ送られた。愛のかぎりを尽くされ  
思い残すことはないであろうが、「容の消えて骨」とは痛切  
である。秋の美しい諸鳥が来て慰めてくれるが、残酷な現つ  
は寂しい。

虫の音と韻き合ひたる磁器の壺 一志貴美子

最後の投句との意識はなかった。お好きな壺を見つめ、秋  
の深まりを感じている。人生の深みとは虫の音と壺との唱和。

お母さんにこれが最後の親孝行。さようなら。最高にきれ  
い。

秋の水沈めれば透く吾が身かな 山崎 和之

鋭い想像力である。大宰治を超える。身体のことをいいな  
がら、わが身の知力、人間を凝視したものか。

籌持てば吾は槃特野分跡 櫻井 喬二

「槃特」は愚か者。寒山拾得の境地に思いを馳せる、作者  
は九十二歳。

鶏頭を見つめて開ける作業場 岩見三七夫

素朴のよろしさ。みんなひよいと飛び越え、その先を詠う  
が、作者は丹念に落穂拾いをする。そこに自然の珠がある。  
美濃市から松本市の私の教室まで毎月四時間かけて通うこと。  
他に岳集・青雲集から推薦候補作をあげる。

生きる場をいつも探して紅葉狩 小松泉左衽子  
寝ころべば吾は秋風の忘れもの 成瀬 嘉一  
養虫の内なる粘り反戦の歌 大野今朝子  
露の世の壁に穴開けカカ・ムラド永遠 芳川莞久子  
疾走の日々に淵あり彼岸花 森 千恵子  
すがれ虫もう頑張らなくていいよ 松本 京子  
おくにちや黒豆入りの御強炊き 矢花 弘子  
秋寒の手首に触れる裏地かな 宮澤 朝子  
白風や雨も滴るソラの墓 二木 暖  
秋風の湖脱皮するここち 宮城 昭代